目　次

はしがき

第Ⅰ部　福沢諭吉はどこにいるのか

第一章　『時事新報』社説起草者判定の必要性……3

1　独立した個人による国家の発展を説いた思想家　3
『西洋事情』で近代化への道筋を示す
ベンジャミン・フランクリンに強く影響された福沢のキャリア
揺れ動いた明治政府との関係　国家に依存しない個人の確立を重視

2　福沢健全期『時事新報』社説起草者判定　7
本書は何を目指しているか　新たな方法論の提案

3　福沢の原稿が残存している社説と、福沢以外の執筆者による社説の区別　9
どのようにして井田メソッドの精度をはかるのか　福沢語彙について
原稿残存社説の福沢語彙による分析　石河執筆社説の福沢語彙による分析

第二章　大正版『福沢全集』「時事論集」の判定……19
1　福沢諭吉の『時事新報』論説を研究する者は少ない　19
あまりにも膨大な『全集』収録の『時事新報』社説
2　『時事新報』論説とは何か　20
社説記者たちの紹介　『全集』編纂者石河幹明　石河による選別の確実性について
井田進也の判別法　井田と論者の立場の違い
3　大正版『福沢全集』「時事論集」所収社説の起草者判定　27
「大正版」所収の社説と「昭和版」所収の社説の資格は明確に異なる
大正版『全集』「時事論集」所収論説・演説一覧について
第三章　石河幹明入社前の社説判定……41
――明治一五年（一八八二）三月～明治一八年（一八八五）三月――
1　前石河社説群とは何か　41
石河の忖度とは無縁な前石河社説群　社説テキスト化の手続き
井田メソッドの有効性と前石河社説群の起草者
2　前石河社説群起草候補者たち　44
前石河社説群起草候補者の語彙と文体――(1)福沢・小幡と編集局上局
前石河社説群起草候補者の語彙と文体――(2)波多野・高橋・渡辺ら編集局下局
3　前石河社説群の起草者推定　48
(1)起草者語彙の選定　(2)語彙使用社説の抽出　(3)推定起草者の判定

4　前石河社説群中の推定福沢直筆社説　50
推定福沢直筆社説の紹介
5　推定福沢直筆社説の概観　54
官民調和の提言　政治意識の涵養　対外問題に関して
第四章　福沢が直接指導していた時期の社説判定……59
――明治一八年（一八八五）四月～明治二四年（一八九一）九月――
1　当該期間の社説の起草者推定　59
本章の目的と方法　(1)起草者語彙の選定　(2)語彙使用社説の抽出
(3)推定起草者の判定
2　当該期間の推定福沢直筆社説　62
推定福沢直筆社説の紹介
3　推定福沢直筆社説の概観　69
甲申政変後の国際関係　条約改正の意義　立憲体制の準備としての処世論
憲法制定と実業の立場　議会政治はいかに運営されるべきか
第五章　福沢が権限を移譲していった時期の社説判定……75
――明治二四年（一八九一）一〇月～明治三一年（一八九八）九月――
1　菊池武徳一時退社後の人手不足　75
本章が扱う範囲　明治二五年春の「卒業旅行」

2 当該期間の推定福沢直筆社説 76
推定福沢直筆社説の紹介
3 推定福沢直筆社説の概観 80
初期議会をめぐって　日清戦争期の『全集』非収録社説　戦後処理をめぐって
朝鮮独立論と政党内閣論など

第Ⅱ部　国内問題に関する社説と福沢

第六章　宗教論——国民宗教を希求し、キリスト教国化を予言 …… 91
1 福沢のキリスト教容認論への転換を解く鍵は『全集』非収録社説にある 91
福沢の豹変　あまりにも不自然なキリスト教容認論
2 キリスト教関連社説の一覧 93
福沢健全期『時事新報』中キリスト教関連社説一覧
3 豹変を説明する『全集』非収録社説の発見 97
「外国宣教師は何の目的を以て日本に在るか」　「日本教法の前途如何」
4 ノルマントン号事件前のキリスト教関連社説 101
キリスト教を主題とする社説は少ない　「耶蘇教国」

5　ノルマントン号事件後のキリスト教関連社説　104
「ノルマントン号事件の軽重如何」　「ノルマントンの不幸に付き耶蘇宣教師の意見を問う」
「耶蘇教会女学校の教育法」　「耶蘇教を入るゝか仏法を改良するか」
本章で明らかになった七項目

第七章　興業論——商工立国のほかに道なし……109

1　『時事新報』創刊前の興業論　109
どのようにして興業論を限定するか　『時事新報』に先行する単行本　『民間経済録』
『通貨論』　『民情一新』

2　福沢健全期『時事新報』中の興業論関連社説の一覧　112
興業論関連社説群の内訳

3　興業論関連『全集』非収録社説の紹介　123
「大に鉄道を布設するも商業顚滅の来る気遣いなし」
「相場の陋風は一掃す可し商売社会の安寧は重んぜざる可らず」　「尚商時代」

4　興業論関連社説の概観　132
経済政策との関係　第Ⅰ期「松方財政期」　第Ⅱ期「銀本位制導入期」
第Ⅲ期「産業資本形成期」　第Ⅳ期「日清戦争前後期」　第Ⅴ期「金本位制導入期」
本章で明らかになった四項目

第八章　移民論――海外移住にあたり心がけるべきこと……138
1　福沢署名著作における移住・殖民の用例　138
ホスト国に同化する移民（立場Ⅰ）と入植地の日本化を目指す移民（立場Ⅱ）
『時事新報』の立場と福沢の立場の異同　「移住」「移民」「植民」「殖民」「帰化」「移植」
福沢本人による「移住」「植民」の用例は少ない
2　福沢健全期『時事新報』中の移民論関連社説の一覧　141
福沢健全期移民論関連社説一覧　「人民の移住と娼婦の出稼」と慰安婦
3　ウェイクフィールドの組織的植民論　145
忘れられた経済学者ウェイクフィールド
4　移民論関連『全集』非収録社説の紹介　147
「日本人の海外移住」　「植民地の経略は無用なり」　ウェイクフィールドからの影響
5　移民論関連社説の論調の変遷　153
前期一三年間と後期三年間　前期社説の紹介　後期社説の紹介
本章で明らかになった七項目
第九章　交通論――鉄道は民設かつ米国方式で……160
1　『時事新報』創刊前の交通論　160
研究史の整理　『民情一新』　『民間経済録』　鉄道事業の二つの利点
2　福沢健全期『時事新報』中の交通論関連社説の一覧　164
交通論関連社説一覧　交通論関連社説の内訳

3　交通論関連『全集』非収録社説の紹介　174
「文明の交通法は必ずしも高尚ならず」
4　交通論関連社説の論調の変遷　177
交通論の六期区分　第Ⅰ期「問題設定期」　第Ⅱ期「基幹線選定期」
第Ⅲ期「私設鉄道提唱期」　第Ⅳ期「地方鉄道奨励期」　第Ⅴ期「私設鉄道奨励期」
第Ⅵ期「鉄道国有化反論期」　本章で明らかになった七項目

第十章　『全集』非収録署名入社説――福沢関与の可能性について……189
1　誰が署名入社説を執筆したのか　189
本章で署名入社説を扱う理由　署名入社説の執筆者について
2　『全集』非収録署名入社説の一覧と分布　192
署名入社説の出現数　署名入社説における翻訳の分布
3　特異な署名入社説の紹介　206
「俗宗旨俗僧侶」について　「沖縄県よりの来翰　沖縄県一老生」
「時事新報に謝す　東京神田生」　本章で明らかになった八項目

第Ⅲ部　対外問題に関する社説と福沢

第十一章　清国論――貿易相手国として付き合いつつ、市民革命に期待……215

1　清国関連『全集』非収録社説の発見　215

福沢は対外強硬論を主張していたか　『全集』非収録のうち重要な社説

「日本支那の関係」　「支那人の活発なるは文明の利器に由るものなり」

「今後支那帝国の文明は如何なる可きや」　「支那人民」　「支那の運命」

2　福沢健全期『時事新報』中の清国関連社説の一覧　224

清国関連社説の数は膨大である　清国関連社説全八六三編のうち一九二編の一覧

3　清国関連社説の論調の変遷　235

論調の変遷は全八六三編で追う　第Ⅰ期「前朝鮮壬午軍乱期」

第Ⅱ期「朝鮮壬午軍乱期」　第Ⅲ期「第一次清仏戦争期」

第Ⅳ期「第二次清仏戦争甲申政変期」　第Ⅴ期「長崎清国水兵騒乱事件期」

第Ⅵ期「生糸貿易競合期」　第Ⅶ期「日清戦争期」　第Ⅷ期「貿易拡大期」

本章で明らかになった六項目

第十二章　朝鮮論――独立国家として扱い、通商や軍事の協定を結ぶべき……246

1　朝鮮関連『全集』非収録社説の発見　246

現行版『全集』の問題　「朝鮮変乱の禍源」　「朝鮮国の独立」

2　福沢健全期『時事新報』中の朝鮮関連社説の一覧　251
朝鮮関連社説とは何か
3　朝鮮関連社説の論調の変遷　269
朝鮮関連社説の八期区分　第Ⅰ期「前壬午軍乱期」　第Ⅱ期「壬午軍乱期」
第Ⅲ期「壬午甲申間期」　第Ⅳ期「甲申政変期」　第Ⅴ期「対清国牽制期」
第Ⅵ期「防穀政策対応期」　第Ⅶ期「日清戦争期」　第Ⅷ期「対露国牽制期」
本章で明らかになった四項目

第十三章　海軍論――人材育成を優先させるべき……278
1　『時事新報』社説中海軍論の一覧　278
福沢の海軍増強論は常識　海軍論関連社説五〇編　石河による社説採録への疑義
創刊以来一四年間の海軍論社説が『全集』非収録
2　福沢健全期の海軍論の概観および注目すべき『全集』非収録社説　282
海軍論社説の三期区分　第Ⅰ期「国内建艦提言期」　第Ⅱ期「人材育成提言期」
第Ⅲ期「大軍拡提言期」
3　軍事史との関わりを探る　286
実際の海軍力増強との関連　本章で明らかになった四項目

第十四章　陸軍論――不要な兵員は削減すべき……291
1　いかにして陸軍論を選ぶか　291
福沢の陸軍論を限定するのは困難　『時事小言』と『兵論』の記述

2 『時事新報』社説中陸軍論の一覧　293
社説採録のための準備　『全集』への収録状況
3 陸軍論社説の概観　300
陸軍論をいかに区分するか　陸軍論の七期区分　第Ⅰ期「朝鮮壬午軍乱期」
第Ⅱ期「徴兵論提言期」　第Ⅲ期「朝鮮甲申政変収拾期」　第Ⅳ期「徴兵論再燃期」
第Ⅴ期「軍備充実提言期」　第Ⅵ期「日清戦争期」　第Ⅶ期「軍備拡張提言期」
4 注目すべき『全集』非収録社説　306
『時事新報』の論調と福沢本人の考え　「軍政上の改良は先ず其経済法よりす可し」
「軍器を米国に需むべし」　「徴兵令」　本章で明らかになった九項目
第十五章　外交貿易論――不平等条約改正の提唱……312
1 『時事新報』創刊前の条約改正交渉　312
本章が外交論と貿易論をともに扱う理由　本章の研究史における意義
2 福沢健全期『時事新報』中の外交貿易論関連社説の一覧　314
外交貿易論の九期区分
3 外交貿易論関連『全集』非収録社説の紹介　325
「支那朝鮮の外国交際」　「松方内閣と条約改正」　「軽々しく同盟条約を結ぶ可らず」
4 新聞記者にして外交官・波多野承五郎（日清戦争前の論点）　333
波多野承五郎の生涯　『波多野承五郎君小伝』　小伝の記述と社説の関係
アジア歴史資料センター資料　波多野に関する新事実

5　福沢諭吉は「日英同盟」の主唱者か（日清戦争後の論点）　339
日英同盟論者福沢諭吉　三好守雄編『日清事件時事問題輿論演説』
『時事新報』記事「倫敦のペルメル　バツヂエツト新聞」　A・マハンのシー・パワー論
『時事新報』に掲載された日英同盟推進論　福沢本人と日英同盟の関係
6　外交貿易論関連社説の論調の変遷　345
第Ⅰ期「井上外交前期」　第Ⅱ期「井上外交後期」　第Ⅲ期「第一大隈外交期」
第Ⅳ期「青木外交期」　第Ⅴ期「榎本外交期」　第Ⅵ期「陸奥外交前期」
第Ⅶ期「陸奥外交後期」　第Ⅷ期「第二大隈外交期」　第Ⅸ期「西外交期」
本章で明らかになった一二項目

第Ⅳ部　福沢伝と『全集』の編纂者・石河幹明

第十六章　福沢諭吉像を歪めたのは誰か……359
1　本章が明らかにすること　359
井田メソッドは未だ受け入れられてはいない　都倉武之「執筆名義」論文
2　「不誠実」とは「故意」という意味である　361
「自家撞着」に満ちた福沢の言説　石河の社説採録に関する三つの疑問点
3　同じ「時事論集」を称していても「大正版」と「昭和版」とでは内実が異なる　364
『福沢諭吉事典』のささいな欠陥　福沢存命時の新聞編集部

4 『修業立志編』は『全集』に収録されるべきだ　369
本研究を開始した当時のことども　掲載日順に並べて分かること
5 徳富蘇峰の福沢批判に小泉信三は『続福沢全集』を用いて応えた　373
「自家撞着」説は蘇峰に由来する　小泉信三による蘇峰への反論
第十七章　石河明子著『石河幹明伝』の意義……381
1 現在は過去の延長上にある　381
文芸春秋社からのメール
2 作者が『石河幹明伝』の執筆を思い立つまで　383
待ち望まれていた石河の伝記　『福沢諭吉の真実』は「信用できない本」
3 待ち望まれていた『石河幹明伝』の刊行　385
『石河幹明伝』の書誌　『石河幹明伝』の研究史への貢献
4 本文「9悪人説への反論」への応答　388
石河幹明悪人説の由来　脳卒中の発作後に社説は立案できたか
福沢と石河の立場は異なる
5 別冊『文春新書「福沢諭吉の真実」平山洋著における不審点』への応答　393
『不審点』その一への応答　『不審点』その二への応答　『不審点』その三への応答
『不審点』その四への応答　『不審点』その五への応答　『不審点』その六への応答
『不審点』その七への応答　『不審点』その八への応答　『不審点』その九への応答
『不審点』その十への応答

6　石河幹明の「誠実」をもはや信じることはできない　402
『石河幹明伝』は『福沢諭吉の真実』批判としては弱すぎる　石河弁護のための三条件

終　章　最近の研究動向との関連……407
最初の福沢発表　平山説に対する三つの立場　晩年の福沢は石河社説に反論したのか
重要と思われる『全集』非収録社説五編　移民論・海軍論・陸軍論の論調転換
今後の『時事新報』社説研究の進め方

参考文献　415
あとがき　421
福沢諭吉略年譜　423
『時事新報』社説索引
書名索引
人名索引